

解 題

浄土三部経解題

浄土宗元祖法然上人（一一三三―一二二二）は『選択本願念仏集』（第一聖浄二門篇）に、浄土一宗立教開宗の条件ともいふべき事項を出しておられる。それは、

- 一、浄土宗という宗名に先例のあること。
 - 二、浄土門という聖道門に異なる教判を有すること。
 - 三、「浄土三部経」という所依の経をもつこと。
 - 四、浄土宗に師資相承血脈の譜が存すること。
- などである。いずれも重要であるが、ことに大切なのは所依の経である。「浄土三部経」は一宗にとってもっとも尊崇すべき根本聖典である。
- 今、浄土宗所依の三経を解説するにあたって、まず「浄土三部経」について簡単にふれてみる。

一、『無量寿経』『観無量寿経』『阿弥陀経』の三経を「浄土三部経」と呼ぶことは、法然上人の『選択集』（第一篇）に、

正に往生浄土を明すの教とは三経一論これなり。三経とは、一には『無量寿経』、二には『観無量寿経』、三には『阿

『弥陀經』なり。一論とは天親の『往生論』これなり。あるいはこの三經を指して「浄土三部經」と号す。とあることもとづく。

二、「浄土三部經」を浄土宗の所依の經とすることは、右につづいて、

今はただこれ弥陀の三部なり。ゆえに浄土の三部經と名づく。弥陀の三部とは、これ浄土正依の經なり。

とあることもとづく。

三、「浄土三部經」の中、浄土宗においては『観無量寿經』を正所依の經とするが、これも法然上人にはじまる。そのことを伝えたのは第二祖鎮西上人（一一六二—一二三八）であって、『浄土宗要集』（『鎮西宗要』）第一には、

その因縁、弁阿（鎮西上人）これを然師（法然上人）に伝えたてまつるに三義あり。一には有縁の經なるがゆえに。二には相伝の經なるがゆえに。三には三昧発得のゆえに。

とある。つまり善導大師は『観無量寿經』によって浄土宗を立てられたと仰ぎ、そのことを重んじるのである。その理由は、善導大師には『無量寿經』と『阿弥陀經』の積書が残っていないが、これを不造と見て、ひとり『観無量寿經』を重視して『証定疏』といわれる『観經疏』（『玄義分』「序分義」「定善義」「散善義」）四卷を著わされたと解してのことである。加えて法然上人が「偏えに善導一師に依る」といって浄土宗を開かれたのは、もっぱらこの『観經疏』の説示によってであるから、このこともあわせて、『観無量寿經』は自然に三經の中には正依中の正依の經となっていた。後世第七祖聖岡上人（一二三四—一四二〇）の時代になると、

問う、正依の三經の中において、大師（善導大師）は、まさしくいずれの經に依って浄土宗の宗義を立てたまえるや。

答う、これに總依三經、別依一經ということあり。いうところの別依一經とは観經これなり。別依観經についてすなわち三つの由あり。一には有縁の經なるがゆえに、二には相伝の經なるがゆえに。三には三昧発得の經なるがゆえ

に。(『教相十八通』)

と整えられるにいたる。

もっとも善導大師には『無量寿経』の积書としての『弥陀義』百卷があったといわれるが、伝わっていない。また『法事讃』二卷は『阿弥陀经』の注釈といえるが、『観经疏』には及ばない。このような事情もあって、『観無量寿经』は浄土宗の正中の经となつてゆく。ただしそのことは他の二经との間に優劣と軽重を立てるといふものではない。三经はことごとく「正に往生浄土を明すの教」として拜するのみである。

四、三经それぞれの成立事情は別にして、法然上人は内容から見ても、順序次第を立てられた。第一は『無量寿经』で、法蔵菩薩の発心修行から本願成就の依正二報莊嚴及び三輩往生等を詳しく明すからである。第二は『観無量寿经』で、弥陀浄土への往生行を中心に念仏と諸行を明すからである。第三は『阿弥陀经』で、往生行としてもはや諸行は説かず、念仏一行を明すからである。

以上「浄土三部经」について思うところを述べたが、詳しくは法然上人の『選択集』や『三部经积』（『無量寿经积』、『観無量寿经积』、『阿弥陀经积』）―『昭和重修法然上人全集』や『浄土宗全書』所収）を読みたい。

なお「浄土三部经」全般の理解のためには、浄土宗としては義山上人（一六四八―一七一七）の『浄土三部经随聞讲録』（『無量寿经随聞讲録』、『観無量寿经随聞讲録』、『阿弥陀经随聞讲録』）―『浄土宗全書』（第十四卷）所収）や観徹上人（一六五七―一七三二）の『浄土三部经合讚』（大正大学・佛敎大学等に所蔵）の披見がのぞまれる。また初学者には勸学坪井俊映師の『浄土三部经概説』（隆文館）が推奨される。

一、『無量寿経』について

『無量寿経』二卷 曹魏 康僧鎧 訳

本経の成立はインドである。漢訳は五存七欠（擬然『浄土法門源流章』）前後十二訳があったというから、本経には異本が多く存在したことになる。十二訳は唐の智昇の『開元釈教録』に載せる十一訳と、それ以後に訳された一訳を合せ数える。

一、『無量寿経』二卷 後漢 安世高 訳

二、『無量清浄平等覚経』二卷 後漢 支婁迦讖 訳

三、『大阿弥陀経』二卷 呉 支謙 訳

四、『無量寿経』二卷 曹魏 康僧鎧 訳

五、『無量清浄平等覚経』二卷 曹魏 白延 訳

六、『無量寿経』二卷 西晋 竺法護 訳

七、『無量寿至真等正覚経』一卷 東晋 竺法力 訳

八、『新無量寿経』二卷 東晋 仏陀跋陀羅 訳

九、『新無量寿経』二卷 劉宋 宝雲 訳

十、『新無量寿経』二卷 劉宋 曇摩蜜多 訳

十一、『無量寿如来会』二卷 唐 菩提流志 訳

十二、『大乘無量寿莊嚴経』三卷 宋 法賢 訳

以上の中、現存するのは第二訳『平等覚経』第三訳『大阿弥陀经』第四訳『無量寿经』第十一訳『無量寿如来会』第十二訳『無量寿莊嚴经』である。この他に梵本とチベット訳もあり、いずれも『浄土宗全書』に入れられている。

先年『無量寿经』の成立史的研究を大成された已講香川孝雄師によると、現存五訳及び梵、藏二本の成立順は、経の構文や思想内容、さらには訳経史の上から見て、

一、『大阿弥陀经』

二、『平等覚经』

三、『無量寿经』

四、『無量寿如来会』

五、『無量寿莊嚴经』 梵本・チベット訳

の順となるという。同師はまたこの中『大阿弥陀经』は原始大乘經典に属し、西紀一世紀頃にガンダーラからカピシに至るカーブル河流域で成立し、『無量寿经』は西紀二世紀から三世紀頃にかけて成立したといわれる。また『無量寿经』の訳者が曹魏の康僧鎧であることは疑わしく、結論的には劉宋の永初二年(四二二)に宝雲によって訳されたとするのが妥当という。十二訳の有無や訳者の当否等の論議と学説の詳細は、香川孝雄師の『無量寿经諸本の対照研究』及び『浄土教の成立史的研究』(山喜房仏書林)に譲らせていただく。

以上のような学問的研究成果は尊重されなければならない。ただ浄土宗においては、所依の経である『無量寿经』は曹魏の康僧鎧訳として現今も伝持されているのが実情である。

中国や朝鮮においては数多くの学匠が『無量寿经』に関心を示したので釈書も多い。代表的なものは、

一、『無量寿经義疏』二卷 隋 慧遠

二、『無量寿経義疏』一卷 唐 吉藏

三、『両卷無量寿経宗要』一卷 新羅 元曉

四、『無量寿経連義述文贊』三卷 新羅 憬興

五、『無量寿経義疏』二卷 新羅 法位

六、『無量寿経述義記』三卷 新羅 義寂

である。前四本は『浄土宗全書』（第五卷）に収められており、後二本は復元本が勧学惠谷隆戒師の『浄土教の新研究』に入れられている。

わが国への『無量寿経』の招来は奈良朝である。「正倉院文書」（『大日本古文書』所収）には天平八年（七三六）に『无量寿経』の名が見える。（石田茂作氏『奈良朝現在一切経目録』）

浄土宗において『無量寿経』の伝来を追究したのは義山上人（一七二一—一七九四）である。虎関禅師（一二七八—一三四六）の『元亨釈書』の記述を『日本書紀』によって訂し、『無量寿経』は唐僧の惠隠が舒明天皇十一年（六三九）に招来し、翌年早くも宮中において講説し、孝徳天皇白雉三年（六五二）にも講経したことを指摘している。

浄土宗における『無量寿経』の釈書としては、先掲の法然上人の『無量寿経釈』は当然のこととして、第三祖良忠上人（一一九一—一二八七）門下の三条派の祖である道光上人（一一三〇又は三一）の『無量寿経鈔』七巻が重要である。

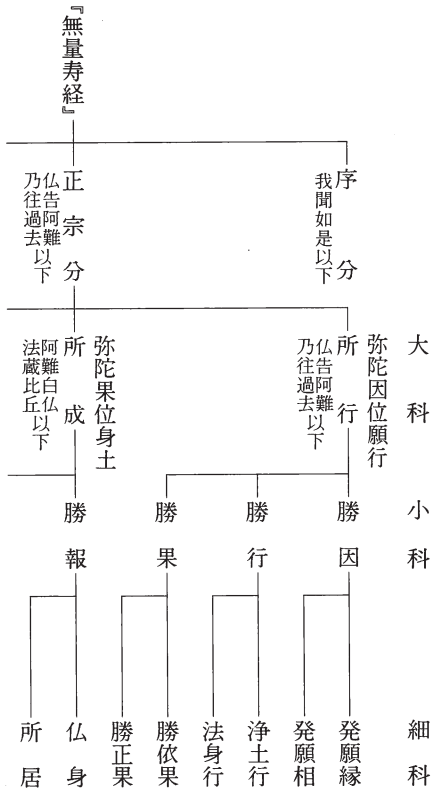
この書は道光当時に、わが国に伝えられていた中国や朝鮮の諸学匠の釈書、及び同時代に行われていたわが国諸師の諸疏釈を出し、浄土宗義の顕影にも心を致して解釈を行っているので、『無量寿経』の理解のためには必見の書である。

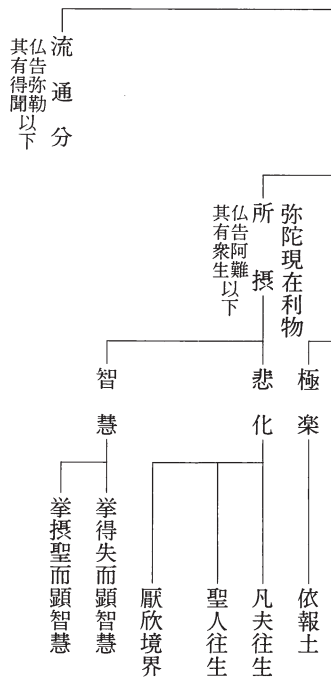
下って第八祖聖聡上人（一三六六—一四四〇）の『大経直談要註記』二十四巻（『浄土宗全書』第十三巻所収）や、先掲の義山上人の『無量寿経随聞講録』六巻（『浄土宗全書』第十四巻所収）、観徹上人の『無量寿経合讚』四巻も重要な注釈書であ

る。

『無量寿経』は二巻であるから、双巻経ともいい、三経の中では大部のゆえに大経ともいう。(『大無量寿経』という呼称は浄土宗では用いない。)

解釈にあたっては、序分・正宗分・流通分の三科を用いるのが通例である。浄土宗としては『無量寿経鈔』に出す科文に導かれて経文を理解するのがふさわしいであろう。この科文には三種がある。一は慧遠法師の『無量寿経義疏』の三分科で、これを大科という。一は善導大師の『観経疏』「序分義」に、阿弥陀仏の仏事の一部始終を讀えるのに用いた七科で、これを小科という。そして『無量寿経鈔』自体の細科である。合せて図示すると次のようになる。





この科文を見ると、『無量寿経』は大乗菩薩道の一部始終を明していることがわかる。大乗といい菩薩道といい、その精神は、四弘誓願で示されるように自利利他・自覚覚他である。『無量寿経』は法蔵比丘の発心修行とその果上の仏身仏土及びその撰取のはたらきを述べる。菩薩道の実際はどうか。いかにして発願せられ成就せられたか。現にいかなる役割を果しているのか、これらをことごとく『無量寿経』は答えているのである。

以下簡単に説明してみると、序分では釈尊は五徳（世尊・世雄・世眼・世英・天尊）を瑞現して、『無量寿経』を説くことが今日の意趣であることを示す。

正宗分の中で大科の所行とは、法蔵比丘の行じたところという意味で、因位（菩薩位）の発心と修行を指す。法蔵菩薩は世自在王仏（世饒王仏ともいう）の教えを受けて、二百十億の浄土の中から、五劫に思惟して西方安樂世界を選択された。一切衆生を救わんがためである。その実現を願って四十八願を立てられたいわゆる阿弥陀仏の本願（別願）であ

る。これを大別すると三になる。この願名については訓読経文の下注を参照されたい。

第十二光明無量願

一、摂法身願 第十三壽命無量願

第十七諸仏称揚願

二、摂浄土願

第三十一国土清浄願

第三十二国土嚴飾願

三、摂衆生願 第十八念仏往生願をはじめ余の四十三願

摂法身、摂浄土の二願は自利の願、摂衆生の一願は利他の願である。願が願で終わっては無に帰す。願は必ず果されなければならない。それゆえ本願は誓願ともいわれる。菩薩の時の願であるから因願・宿願ともいい、自利利他の大乘精神を内容とするから弘願とも重願ともいわれる。法蔵菩薩はこの願成就のために、六波羅蜜行をはじめ諸善万行を修し納めて阿弥陀仏となられる。

所成とは本願（四十八願）成就の仏身仏土をいう。阿弥陀仏を本願成就身とも酬因感果身ともいうのは、よくその仏身を表現しているのであって、阿弥陀仏が摂法身願、摂浄土願、摂衆生願を満足せられた報身の仏であることを示すのである。報身の所居の世界を報土という。浄土宗において所求の浄土は、この報土である西方安樂世界であり、所歸の仏はこの報身である阿弥陀仏である。

阿弥陀仏は今より十劫以前に本願を成就して、この娑婆世界を去ること西方十万億刹を超過した安樂世界に、今現に

まします現在仏である。安樂世界にはこの阿弥陀仏をはじめ菩薩・声聞・十方世界よりの往生人が住まう。これを正報・莊嚴という。その正報の依りどころである国土を依報・莊嚴という。莊嚴とはかざることの意で、その世界を造りあげている存在をいう。この依正二報・莊嚴の世界の勝れた相を説いて『無量寿経』の卷上は終る。

所撰とは阿弥陀仏の今現在の撰取(救い)のはたらきをいう。『無量寿経』の卷下はこれを説く。すなわち安樂世界への往生の相を示すのである。

はじめに凡夫(三輩)往生では、第十八願文に誓われた念仏往生が説かれるが、われわれはここで去行(往生行)としての念仏を確かに受けとめるべきである。その他聖人(菩薩)往生、信心往生、疑心往生、化生、胎生等々、往生について知るべきことが詳しく説かれている。

安樂世界は、何人たりとも来たるを拒まず、生れたならば必ず仏道を成就できる。それにもかかわらず現実には「往き易くして、人なし」である。このことをかんがみて、娑婆の痛苦、浄土の受樂を懇ろに説いて往生浄土を欣わしめる。

これで正宗分が終る。

流通分は、『無量寿経』を経道(仏教)滅尽の後も、慈悲哀愍をもって百歳の間、この世間に止住せしめるといふ積尊の語がわれわれにはこの上もなく憑しく受けとめられる。

『無量寿経』を拝読するにあたっては、浄土宗人として、法然上人の選択のお考えがこの経にもとづいていることに思いをいたして、選択本願・選択讚歎・選択留教というように、『無量寿経』において、念仏のみがひとり重んぜられる過程をよく汲みとられんことを願うものである。

二、『観無量寿経』について

『観無量寿経』一卷 劉宋 曇良耶舎 訳

本経の成立については、大別すると印度、中央アジア、中国の三説があり一定しない。議論は、この『観無量寿経』に、梵本もチベット訳もないこと。康僧鑑訳『無量寿経』の内容を踏んでいること。西紀五世紀頃に中国で盛んに訳出せられた観仏經典と通ずるものがあること、等より起っている。中央アジア説や中国説が有力であるが、最近では印度説も形を変えてよみがえり、またそれに対する批判も行われている。

浄土宗の学者では、春日井真也師の中央アジア説が有名である。同師論文「観無量寿経における諸問題」（『仏教文化研究』第三巻所収）に就いて見られたい。

また香川孝雄師も、本経の成立を西紀四世紀以降に置き、断定はされないまでも、観仏經典や疑偽經典（中国撰述）といわれる仏名經典ができた時代と地域に、本経が近いということを指摘し、中央アジア説からむしろ中国撰述説の方へ傾きを示しておられるようである。（『浄土教の成立史的研究』）

漢訳は一本が現存し、劉宋の曇良耶舎訳というのはおおむね認められている。もっとも梁の僧祐の『出三蔵記集』や隋の費長房の『歴代三宝紀』、さらには唐の智昇の『開元釈教録』等を合せると、都合四度の訳出が『観無量寿経』にはあったように見られるが、確かめようがない。他にウイグル語訳の断片があるが、これは漢訳を再訳したものである。

ただ浄土宗においては、正所依の経として『観無量寿経』劉宋曇良耶舎訳を頂戴するのみである。なお本経には写

本・刊本多種が存在するが、本宗は善導大師が用いられたといういわゆる流布本に依るのである。

中国では多くの学匠が『観無量寿経』を重視し、注釈書も十数種現存する。朝鮮のものは今は伝わっていない。主なものは、

- 一、『観無量寿経義疏』二卷 隋 慧遠
- 二、『観無量寿仏経疏』二卷(伝) 隋 智顛
- 三、『観無量寿経義疏』一卷 唐 吉藏
- 四、『観無量寿仏経疏』(『観経疏』) 四卷 唐 善導
- 五、『観無量寿経義疏』二卷 唐 道闇
- 六、『観無量寿経記』二卷 唐 竜興
- 七、『釈観無量寿仏経記』一卷 唐 法聡
- 八、『観無量寿仏経疏妙宗鈔』六卷 宋 知礼
- 九、『観無量寿仏経義疏』三卷 宋 元照
- 十、『観経義疏正観記』三卷 宋 戒度
- 十一、『観経扶新論』一卷 宋 戒度

である。一から十一の中、五と六を除いて、二は『浄土宗全書』第二巻に、その他は同第五巻に収められている。五と六は復元本で、恵谷隆戒師の『浄土教の新研究』に入れられている。

注釈書の中、浄土宗において重要なものはもちろん善導大師の『観経疏』である。この書は『楷定疏』ともいわれ

て、古今の学匠の『観無量寿経』の釈を批判し、自らの『観経疏』に依らしめることを宣言した書である。楷定とは手本として定めるという意味である。この書は善導大師が三昧発得され、阿弥陀仏の指示を得て造られたものであるから『証定疏』ともいわれる。また尊んで『御書』ともいい、四卷あるから『四帖疏』ともいう。

『観無量寿経』を解釈するにあたっては、善導大師は経が説かれた本意、すなわち説意を見出すことに重点を置かれた。余他の諸師が経の文相に拘泥したことと大いに異なる。後者の代表は慧遠で『観無量寿経義疏』がこれである。ただし詳しく見ると、善導大師もこの書にヒントを得ておられることも事実で、三十六箇所ほどあるという。『観無量寿経』を読むにあたっては、これらのことも念頭において、直接的には『観経疏』の説示に添うて理解するのが浄土宗人としてはふさわしいと思う。

わが国への『観無量寿経』の伝来は奈良朝で、「正倉院文書」(『大日本古文書』所収)には天平十四年(七四二)に『観無量寿経』の名が見える。

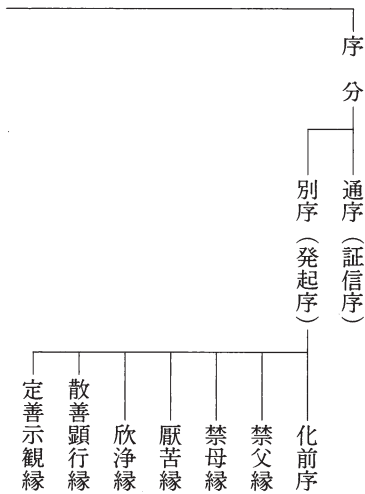
浄土宗における釈書としては、法然上人の『観無量寿経釈』をあげなくてはならない。およそ『観無量寿経』の釈書を総称してまた『観経疏』というが、浄土宗においては江戸期以後は別として、それまでの釈書は善導大師の『観経疏』を注釈したものばかりである。中にあって法然上人の『観無量寿経釈』は直接『観無量寿経』を釈されたものである。ただし法然上人とても『観経疏』の釈意にもとづいての解釈であるから、善導大師の影響は大きい。

以上のことから、浄土宗においては、『観経疏』といっても、それは『観経疏』の注釈を意味する。その主なものをあげると、第三祖良忠上人(一一九九—一二八七)の『観経疏伝通記』十五卷があり、これを略した『観経疏略鈔』四卷も含めて、『浄土宗全書』第二卷に納められている。また『伝通記』自体の末書には第四祖良暁上人(一二五—一三三八)の『伝通記見聞』十五卷(『統浄土宗全書』第三卷—旧第十一卷所収)と第七祖聖岡上人(一三四—一四二〇)の『伝通記釋鈔』

四十八卷（『浄土宗全書』第三卷所収）があり、『樛鈔』の末書に第八祖聖聡上人（一三六六—一四四〇）の『樛眼記』一卷（『統浄土宗全書』第三卷—旧第十一卷所収）がある。

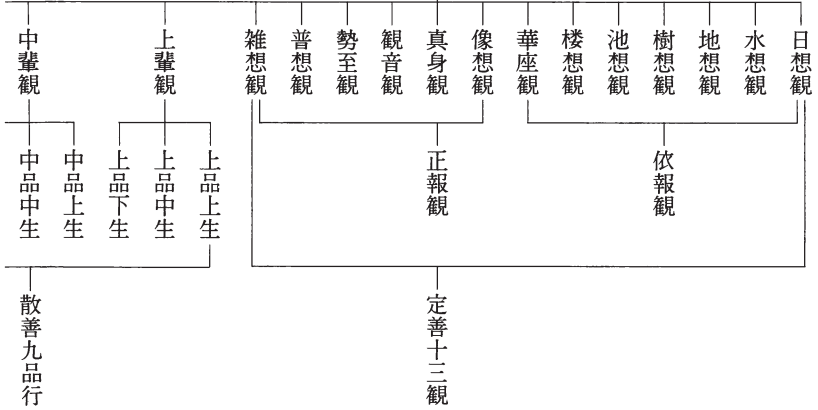
良忠上人以下の积書は浄土宗として重要なものであるが、大部かつ繁雑さも手伝って、読者をして望洋の嘆あらしめるかも知れない。結局は江戸期義山上人の『観無量寿経随聞讲録』観徹上人の『観無量寿経合讚』（いずれも初章に出した『浄土三部経随聞讲録』『浄土三部経合讚』の一）に依るのがよい。

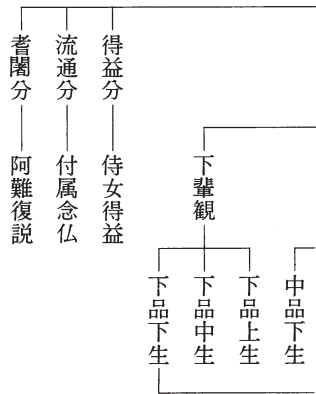
『観無量寿経』の解釈には善導大師の五分科法（序分・正宗分・得益分・流通分・耆闍分）を用いるのが、浄土宗においては通常である。序分に二序七縁（三序六縁）を置き、正宗分に一経両宗を立て、流通分に付属仏名を説いて、見事に『観無量寿経』の説意を表わし出している。得益分は王宮会の正宗分に次ぎ、耆闍分は耆闍会阿難の再説を記す。『観無量寿経』はまた一経両会の経であることが、この科文によって知られるのである。



觀無量壽經

正宗分





序分では二序七縁（三序六縁）の科文で、『観無量寿経』が説かれた因縁をよく知ることができる。浄土宗の総安心としての厭欣心はこの厭苦・欣浄の二縁にもとづき、光台現国は韋提希夫人をして、阿弥陀仏の西方極樂世界を選ばしめることになる。『無量寿経』や『阿弥陀経』に十万億仏土の彼方と説かれる西方浄土が、『観無量寿経』では「去此不遠」と説かれていることを知る。

釈尊はまず随意意の三福（九品と開合の異なりで、世福・戒福・行福をいう）散善を述べ、次いで韋提希夫人の要請に応じて（随他意）十三観の定善を説かれた。終つて九品段に散善諸行を説き、また三心（至誠心・深心・回向発願心）や称南無阿弥陀仏の念仏を説いて凡夫往生を勧説し、無量寿仏の名を持つことを本意として、韋提希夫人ならびに未来世の一切凡天に付属せられた、というのが経旨である。

法然上人によって明らかにせられた選択撰取・選択化讚・選択付属の念仏はすべてこの『観無量寿経』に説かれている。それらのことも意にかけて本経は読まれたいものである。

三、『阿弥陀経』について

『阿弥陀経』一卷 姚秦 鳩摩羅什 訳

本経の成立はインドである。原初形態は『無量寿経』のそれ（『大阿弥陀経』）と大体は同じ時期に、しかも別べつに成立した、と見るのが一般的である。

漢訳は二存一欠といわれる。智昇の『開元釈経録』によると、次の三訳があった。

- 一、『阿弥陀経』一卷 姚秦 鳩摩羅什 訳
- 二、『小無量寿経』一卷 劉宋 求那跋陀羅 訳
- 三、『称讚浄土仏撰受経』一卷 唐 玄奘 訳

ただし第二は当時すでに欠本であった。他に梵本（悉曇文字使用、わが国で発見せられた）とチベット訳が現存する。

漢訳二本は、中国訳経史に名を残す二大翻訳家の手になるもので、『阿弥陀経』は旧訳の代表者羅什によって、姚秦の弘始四年（四〇二）に訳されたと推定されている。『称讚浄土仏撰受経』は、新訳の代表者である玄奘によって、永徽元年（六五〇）に訳された。前経にくらべると、後経は増広部分もあり、訳風も堅く、読誦には不向きである。それゆえか、ひとり羅什訳『阿弥陀経』が世に行われて今日に及んでいる。

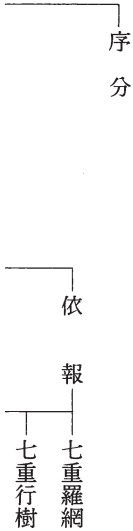
浄土宗の所依の経は、この羅什訳の中でも、善導大師が用いられた『阿弥陀経』であって、いわゆる現行の流布本である。『大正大藏経』所収本等は経文に少異がある。また法然上人が『選択集』で紹介しておられる中国襄陽の『石刻阿弥陀経』（六世紀末）のように、経文が増広されているものもある。

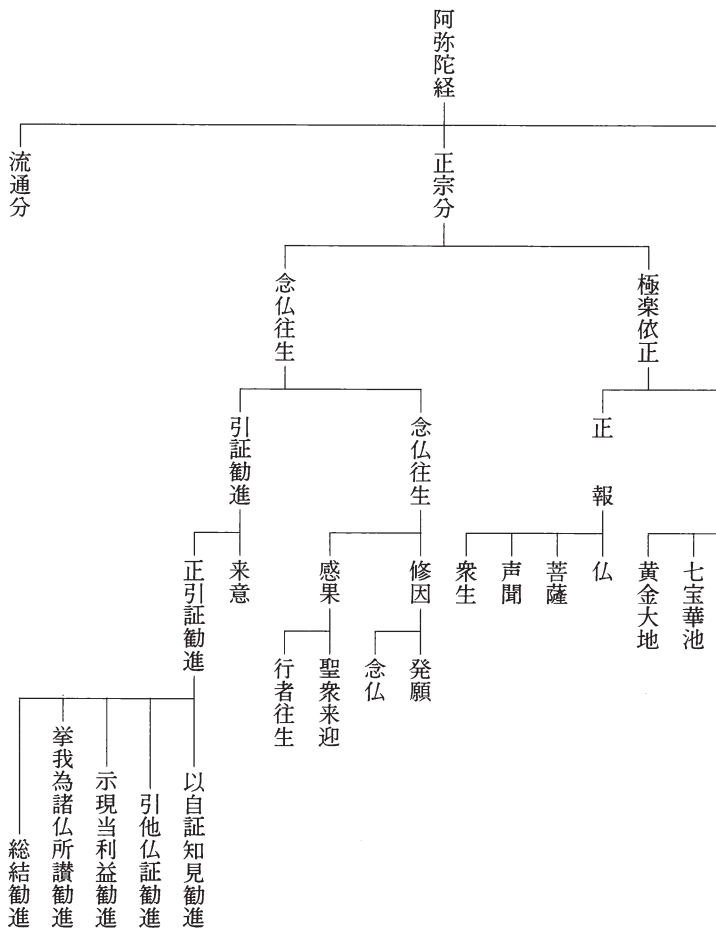
中国や朝鮮においては、多くの学匠によって注釈書が造られた。主なものは次のようである（いずれも『浄土宗全書』第五卷所収）朝鮮の釈書は元暁のものを除いて、今は伝わっていない。

- 一、『阿弥陀経義記』一卷（伝）隋 智顛
- 二、『阿弥陀経疏』一卷（伝）唐 窥基
- 三、『阿弥陀経通賛疏』三卷（伝）唐 窥基
- 四、『阿弥陀経疏』一卷 宋 智円
- 五、『阿弥陀経義疏』一卷 宋 元照
- 六、『阿弥陀経義疏聞持記』三卷 宋 戒度
- 七、『阿弥陀経疏』一卷 新羅 元暁

なお浄土宗として、最も依用すべきは、善導大師の『法事讃』二卷（『浄土宗全書』第二卷所収）である。読誦転経の行儀とは別に、その釈文は『阿弥陀経』解釈の重要な指標である。

わが国への招来は奈良朝で、「正倉院文書」（『大日本古文書』所収）には、神亀四年（七二七）に『阿弥陀経』の名が見える。梵本も慈覚大師（七九四―八六四）の『日本国承和五年入唐求法目錄』等にその名が見えるので、平安朝の初期には伝わっていたのであろう。





『阿弥陀経』の釈書としては源信僧都（九四三—一〇一七）の『阿弥陀経略記』一卷があるが、これは（伝）智顛撰の『阿弥陀経義記』に依ったもの。浄土宗においては、法然上人の『阿弥陀経釈』一卷をまず挙げるべきである。次いで

室町期の聖聡上人の『小経直談要註記』八卷（『浄土宗全書』第十三卷所収）と、江戸期の義山上人の『阿弥陀経随聞講録』一卷、観徹上人の『阿弥陀経合讚』一卷が重要な積書である。

『阿弥陀経』は小部ゆえ小経ともいい、四紙に納め得るので四紙経ともいう。請者なく仏の随意の経であるから無問自説経といわれる。

解釈にあたっては、法然上人の『阿弥陀経釈』の科段を用いるのがよい。

序分は『阿弥陀経』が祇園精舎における説法であることを示す。正宗分は大別すると二段となる。前半は極楽国土の依正二報の莊嚴を説き、後半は念仏往生と諸仏の証誠を明して、衆生に極楽往生を勧進する。主な内容に關説すると、正宗分のはじめに「これより西方、十万億の仏土を過ぎて、世界あり。名づけて極楽という。その土に仏まします。阿弥陀と号したてまつる。今現に在して説法したまう」と説き、所諸の浄土と所歸の仏を示す。極楽の名のいわれについては、その国の衆生は諸もろの苦しみなく、ただ諸もろの樂のみを受けるから極楽と名づける、と簡單明快である。

また極楽国土の仏を阿弥陀と名づける理由は、その仏の光明と寿命が無量無辺であるからといい、その国に往生した衆生はすべて不退転の位に入るといふ。ただ少善根では生れがたく、一心不乱の念仏によって阿弥陀仏の來迎を得て往生できると説く。

六方の諸仏はこの念仏往生を証誠し、釈尊がこの五濁惡世において念仏往生を説くという難事をなしたことを稱讃される。釈尊自らもまた満足してこの経を説き終られる。流通分は聽衆が歡喜信受のうちに法場を録しとどめるのである。

法然上人は六方の諸仏による衆生の念仏往生の証誠を重んじて、このことを選択証誠と名づけられた。この経はまた「一切の諸仏に護念せらるる経」ともいわれ、「証誠護念経」とも「護念経」ともいわれるが、これは念仏の現世利益

を強調してのことといっべてよい。

前にふれたように「浄土三部経」の中では、後説の経で、いわば結経にあたる。

(深貝 慈孝)

無量寿経優婆提舍願生偈（往生論） 解題

天親菩薩（世親）（四〇〇―四八〇年頃）造になる『無量寿経優婆提舍願生偈』は、『無量寿経論』とも、『往生論』とも『浄土論』とも呼称されるが、願生の対象である阿弥陀仏の浄土（二報三蔽）を偈頌をもって讚美すると共に、願生を主とした往還二道を五念門によって示している。

『往生論』一部の体裁は、韻をふんだ詩からなる「偈頌」と、散文による「長行」とからなっている。曇鸞大師はこの『往生論』に画期的な註釈を施したが、その『往生論註』のなかで、『往生論』の説相をふまえながら、「偈頌」を総説分、「長行」を解義分と名づけている。

「偈頌」は五言を一句とし、四句をもって一行とし、総じて二十四行からなり、最後を「無量寿修多羅章句 我以三偈頌総説竟」と結んでいる。曇鸞大師の理解によると「偈頌」の第一行目の四句は、「長行」に示される五念門のなかの、第一礼拝門、第二讚歎門、第三作願門の三門に配当され、第二行目の四句は、この『論』を「優婆提舍」と名づける所以について、上の礼拝門等の三門と下の觀察門等の二門が、ともに阿弥陀仏信仰を説く經典の本意の開頭にあることを示し、第三行から第二十三行にいたる八十四句を觀察門に、第二十四行の四句を廻向門にそれぞれ配当している。

このなか、第四觀察門については、第三行より第十五行目の前半の二句までの五十句を「器世間莊嚴成就」とし、こ

の国土莊嚴を第一莊嚴清淨功德成就等の十七種とし、第十五行目の後半の二句より第十九行目にいたる十八句を「阿弥陀如来莊嚴功德成就」とし、この仏莊嚴を第一莊嚴座功德等の八種とし、第二十行目から第二十三行目にいたる十六句を「彼諸菩薩莊嚴功德成就」とし、この菩薩莊嚴を第一大菩薩徧至十方說法利生章等の四種としている。この仏と菩薩の十二種莊嚴功德成就をもって、「衆生世間莊嚴成就」としている。

「論曰」にはじまり、「無量寿修多羅優婆提舍願生偈略解義竟」を結句とする「長行」は、総じて二、八四六字からなっている。曇鸞大師はこの「長行」を、第一願偈大意、第二起觀生信、第三觀察体相、第四淨入願心、第五善巧撰化、第六障菩提門、第七順菩提門、第八名義撰对、第九願事成就、第十利行満足の十義に分けている。

『往生論』の類本には種々あるが、第一石刻本には中国河南省武安县に位置する北響堂山刻經洞の北斉刻と、河北省房山雷音洞の隋末唐初刻があるが、いずれも「願生偈」のみを刻している。これに対して房山雲居寺南塔地下に埋藏されていた遼刻石経中に『往生論』一部をふくんでいる。また木版大藏経としては宋版の「堂」函、元版の「堂」函、高麗版の「虚」函のそれぞれに、『往生論』一部を収録している。

わが国に現存する写本としては、名古屋市の稲藺山長福寺に承安五年（一一七五）から治承四年（一一八〇）にかけて書写された「七ッ寺一切経」（「甲第九一仮二〇」）中に『往生論』一部（巻末に「一校 栄俊」）がふくまれている。版本としては、兵庫県川辺郡毫撰寺所蔵の永享九年（一四三七）版をあげることができる。本浄土宗聖典所収本は、義山良照上人（一六四八―一七一七）によって、元禄十年（一六九七）の正月に、『往生論註』二巻とともに校訂され、三巻本として刊行された、いわゆる元禄版を底本としている。

類本を比較すると多少文字の違いがあるが、とりわけ、本聖典本はもとより遼刻本、高麗本、七ッ寺本における「長行」の第五廻向門には

云何廻向 不捨一切苦惱衆生 心常作願廻向為首得成就大悲故

と記しているが、宋・元・明の三版には

云何廻向 於彼觀察一切世間苦惱衆生同願生彼安樂国土 願心所有功德善以巧方便作願廻向取衆生不捨一切世間故
と記し目立った違いを示している。なお、宗曉（一一四一―一二二四）編になる『梁邦文類』巻第一に、「無量寿論 往生偈及五門修法 天親菩薩」と題する『往生論』からの抜萃を掲載しているが、それには

廻向門 所有功德善根以方便廻向撰取衆生不捨一切世間故

と記している。おそらく『宋版』大藏經の系統に基づいたのであろう。

『往生論』は費長房の『歴代三宝紀』（三、九）や道宣の『大唐内典錄』（四）によると、北魏第十代節閔帝恭の普泰元年（五三一）、菩提流支訳とし、また、智昇の『開元釈教錄』（六）や円照の『貞元釈教目錄』（九）によると、北魏第九代孝荘帝攸の永安二年（五二九）、菩提流支訳としている。

この『往生論』に註釈を施した最初の人師は曇鸞大師（四七六―五四二年）である。その著作は曇鸞大師が梁武帝の大通年間（五二七―五二九）、江南茅山（江蘇省句容県）に陶弘景（四五一―五三六）を尋ねた帰途、北魏の帝都洛陽で菩提流支三蔵に出会った以後のことである。ついで『往生論』に取り組んだ人師は、『十地經論』を訳出した勒那摩提の思想を継承した慧光（四六八―五三七）の門人道憑（四七八―五五九）に師事した靈裕（五一八―六〇四）で、『統高僧伝』第九によると、『無量寿経』や『観無量寿経』と共に、『往生論』に「疏」を撰述したと記載されている（散逸）。また慧光の門人法上（四九五―五八〇）に師事した浄影寺慧遠（五二三―五九二）は、その著『無量寿経義疏』巻下に、『往生論』の「女人及根缺 二乗種不生」の偈を引用して論考を展開させ、さらに『観無量寿経義疏』末に、五念門を諸種往生行の一として紹介している。したがって『往生論』は曇鸞大師以後、地論宗南道派の諸師によって取り組まれたこ

とを知ることができる。

その後、道綽禪師（五六二―六四五）と善導大師（六一三―六八一）との中間に生存したと推定される弘法寺の迦才師（生存年代不詳）は、『浄土論』三巻を撰したが、その巻上「第三定往生因修何行業
得生淨土」のなかに五念門を引用し、その説を踏えて念仏、礼拝、讚歎、発願、觀察、廻向の六種の行を、往生浄土の行業と指摘している。

善導大師は『往生礼讚偈』を著わし、その前序に往生浄土に関する心行業を示すなか、『往生論』の「長行」に説く五念門の次第順序を変更し、第三讚歎門を第四門に、第四觀察門を第三門に配置替えすると共に、その内容も凡夫にふさわしい「起行」に改めた。また、善導大師は『往生礼讚偈』において、「謹依天親菩薩願往生礼讚偈二十八拜当後夜時礼」として、五言を一句とする九十六句からなる『願生偈』のなか三十二句を省略して、六十四句をもって「後夜礼讚偈」として採用した。さらに善導大師は『観経疏』の玄義分と定善義の上に『願生偈』をとりあげる外、『往生礼讚』前序に示した五念門積を踏えつつ、阿弥陀仏の本願を基調とする往生浄土の行業として、五種正行、正助二業の説を散善義の上に創説するに至った。

『往生論』はわが国にいつ、誰によって請来されたか詳らかでないが、「正倉院文書」（『大日本古文书』所収）によると、八世紀に書写が行われていたことが知られる。石田茂作編「奈良朝現在一切経疏目錄」（『写経より見たる奈良朝仏教の研究』所収）には、天平九年（七三七）、同二十年（七四八）、天平勝宝四年（七五二）に書写が行われたことを指摘しているが、この外、『無量寿経論』という論書名を天平勝宝三年（七五二）、天平神護三年（七六七）、神護景雲三年（七六九）、宝龜二（七七二）年の銘をもつ文書の上に見出すことができる。

恵心僧都源信上人（九四二―一〇一七）は、十門からなる『往生要集』三巻を著わしたが、その第四「正修念仏門」において、天台の円頓止観の伝統精神を、五念門の上に樹立することを企図したため、独自の五念門を打ち立てるにい

たった。

宗祖法然上人（一一三三—一二二二）はその主著『選択本願念仏集』第一章私積段のなかで、「正明往生浄土之教者謂三經一論是也」と指摘し、「一論者天親往生論是也」と、『往生論』をもって浄土一宗の正所依の論書と規定された。法然上人の門下の九品寺流の祖、覚明房長西上人（一一八四—一二六六）は『浄土依憑經論章疏目錄』一卷を著わしたが、その第三「釈経録」のなかに、「往生論注二卷 曇鸞、同論疏五卷 智光元興寺三論宗、同五念門私行儀一卷 明賢山僧谷アサリ、同論後五念門行式一卷 実範、同論五念略作法一卷 蓮花谷明遍、同論五念門頌一卷五 流布、同論臨終五念門行儀一卷 往生論五念門略抄一卷、往生論五念門行儀一卷」と列挙し、「已上浄土論注尺（寸） 九部十四卷」と指摘している。これらの多くは夙に散逸して伝わらない。

このなか、明賢の事蹟は不明であるが、その著は十二世紀初期の作と考えられ、『長西録』の第六「修行録」中に明賢の著作として、「自行略論私記」、「随意別行文」各一卷が列挙されている。実範（一〇八九—一一四四年頃）の「五念門行式」は、長承四年（一一三五）の写本に『念仏式』（龍谷大学蔵）という表題のもとに現存し、明遍（一一四二—一二二四）は法然上人と関係をもつ高野の空阿弥陀仏である。ともかく『往生論』に示される五念門の儀礼化とその註釈書の輩出を『長西録』の上に見ることがができる。

さらに浄土宗第二祖聖光房弁阿弁長上人（一一六二—一二三八）は、善導大師が『往生礼讃』前序に示した五念門を、『末代念仏授手印』のなかに第四重として引用し、「浄土一宗之行」の随一として位置づけている。

（藤堂 恭俊）

浄土三部経音読解説

浄土三部経の読誦法は、宗祖法然上人の時代より今日まで、諸先徳が種々研究されてきた。特に諸学の興隆した元禄・享保年間に、諸宗の碩学と広い交際のあつた義山上人が、宗典籍の読法を全面校訂した。

三部経も元禄四年（一六九一）に「応永二十二年（一四一五）西誉聖聰刊本」・「明応二年（一四九三）当麻行誉上人刊本」・「嘉吉元年（一四四一）伊勢上野入道一宝照珠居士刊本」の三本を校合、四声清濁点を附して刊行し梓版を総本山知恩院〔①〕に置いた。

その後、文化年中に音激上人は、前記①を校訂し巻末に三経字正訛考を附して、総本山知恩院蔵版〔②〕を刊行した。

更に、天保十三年（一八四三）には、京都大雲院の勤息的門が校訂した華頂王宮蔵版が刊行され、訓読の便がはかられた。

尚、他の校訂本を列举すれば以下の通りである。「天保十五年（一八四四）刊・編者不詳・三縁山安民窟蔵版」・「嘉永二年（一八四九）刊・華頂山幹事編・総本山知恩院蔵版」・「嘉永五年（一八五二）刊・百万遍知恩寺慈専校・三縁山眠竜窟蔵版」・「明治三年（一八七〇）刊・三縁山増上寺幹事念達・専称編大雲監修興学会蔵版」・「明治四年（一八七二）刊・巻末に『音激上人の三経字音正訛考』と『大雲上人が嘉永五年に著した刻訓点清濁三部経凡例』

を附し、識語を加えた大雲自費出版・「芝山聚英堂蔵版（編者・刻板年代不詳・嘉永五年大雲上人の刻訓点清濁三部経凡例を卷末に附す）」。

その他、大雲点を改訂したものに、「明治十五年（一八八二）刊・岸上恢嶺本」「明治二十四年（一八九一）刊・久世懷罔本」「明治四十三年（一九一〇）刊・桑田寛随・角田俊徹本」「大正十三年（一九二四）刊・井川定慶本」等があるが、大雲点本の何れの箇所を如何なる理由によつて校訂したか明らかにしていない。また、これら諸本は卷末に大雲上人が嘉永五年に著した「刻訓点清濁三部経凡例」を附しているため、大雲点本と誤解されている。

現在浄土宗では、三部経の読法は一応大雲点によるとなっているが、卷末の「刻訓点清濁三部経凡例」に、

一、三部妙典。文義深遠ニ諸師ノ疏釈広博ニシテ。管見ノ及ブ所ニ非レバ。本経ニ訓点ヲ施スコト。実ニ容易ナラズ。依テ今。科図本ノ指南ニ従ヒ。且合讚ノ解釈ニ参考シテ。訓点ヲ施シ文義ヲ通解シ易カラシメントス。合讚ノ解釈。古今ノ諸疏ヲ折中シテ。詳略宜ニ合ヒ。少モ間然スルコト無ケレドモ。猶訓詁ノ間。一二ノ疑ハシキ事ナキニ非ズ。依テ今是ヲ諸書ニ質シテ。聊是ヲ改ム。固陋恐クハ訛謬アラン。タダ識者ノ校訂ヲ乞フノミ。

とあり、大雲上人の施された訓点即ち大雲点とは、訓読法のことである。

次に、同じ「凡例」に

一、今刻。字音ノ正訛ハ。スヘテ華頂新刻ノ音ニ従フ。呉漢二音ノ差異等。委クハ彼正訛考ヲ閲シテ知ヘシ。とある。音読は華頂新刻の本に依ると云うことである。

明治四年仲夏の沙門大雲欽白に、

正依三経字音清濁ノ呼法ハ義山上人ノ指南ヲ本トス然レドモ世人訓詁ヲ誤リ呉漢二音ヲ訛呼スル者多シ西京浄福寺音激上人之ヲ憂ヒ文化年中字音正訛考ヲ著シ新刻三経ノ後ニ附テ流布ス 云々

とあるように、文化癸酉之歳（一八一三）の華頂監寺識の「三経字音正訛考」を附した総本山知恩院蔵版三部経がそれである。華頂監寺とは、横井徹山師編『淨福寺誌』（音激上人百忌出版）によれば、音激上人が享和三年（一八〇三）より文政十年（一八二七）まで就いていた知恩院の六役のことである。

また同じ本の巻末に

長州厚挟東明寺説普連教上人捨資刻之

とあるがこれについては、信岡上人自叙伝（『浄土宗全書』第十八卷「略伝集」五四〇上）に

文化十二年（一八一五）乙亥夏。本山蔵版附字音正訛考三部経成。蓋依連鏡（教）上人（長州厚挟東明寺主）与岡請之本山。上人喜捨刻費。

とある。これによれば出版は華頂監寺識語の書かれた二年後であることがわかる。故に刊記はないが文化十二年乙亥夏に刊行されたもので、俗に長州版ともいう。大雲上人の凡例の華頂新刻の本〔②〕とは正にこの長州版の三部経である。

以上の理由に依って浄土三部経の読誦法は、音読が音激点、訓読が大雲点に基づくのである。

今般浄土宗に於ける三部経の音読定本の作成を宗務庁教学局より委嘱をうけたが、一宗の定本とすべきものについては、先に述べた通り音激点本即ち文化十年華頂山監寺識「三経字音正訛考」を附し、同十二年夏出版の総本山知恩院蔵版である長州版を底本とし、大雲点真本（明治四年版）が未見のため、同上人監修になる明治三年刊の興学会蔵版と、諸本のなかで唯一半濁音の附してある嘉永五年刊百万遍知恩寺慈専校の三縁山眠竜窟蔵版本を対校本とした。

底本の明らかに割削の誤りと思われるところは、対校本を参照に正し、それ以外は全て音激点に依った全巻に振り仮名を附するについて字音は、底本に仮名が附してあるものはそれに従い、その他は大雲上人出版の明治元年（一

八六八) 刊『訓蒙小字彙』に依った。また連声・促音に依って字音が変化する場合は元の字音を左側に、連声・促音を右記に、促音は仮名を小さくして示した。猶、声点・連声・連濁等の読法についての説明は繁になるため省略した。

なお、現今古本の世に存するもの少なく入手し難き故に、音激点・大雲点の謂の何かを知る為にも、底本の声点を記入し、音激上人の「三経字音正訛考」と大雲上人の「刻訓点清濁三部経凡例」等を巻末に附して後学の便とした。

(花園 宗善)

參考資料

(一) 淨土三部經字音正訛考

(音 激)

一、佛經ハ昔ヨリ吳音ニ讀ム。然ルニ皇朝ニ古ク傳ハル吳音ト云モノ間漢音ト混ジテ、今ノ韻學者ノ讀ム吳音ニ同ジカラザルモノアリ。コレヲ韻書ノ反切、并ニ韻鏡ノ圖ニ律スニ、多ク本音ト合セズ。故ニ近世僧侶ノ韻學ヲ修ル者淨土三經ノ音ニ於テ、舊來誤讀所ヲ正シテ、總テ吳音トナシテ讀マシメントス。然レドモ、其中常ニ讀マザル音多ク雜リテ、コトニ耳ダチテ聞コフレバ人敢テコレヲ用ヒズ、又有和學者ノ說ニ、昔ヨリ此方ニ傳ハル字音ハ、古人親彼國ノ人ヨリコレヲ傳ヘテ、此方ノ音ニ協テ定タレバ、其法精密ニシテ、少モ誤アルニ非ズ。即今ノ漢吳二音是ナリ。其中吳音ハ前ニ定マリ漢音ハ後ニ定マリシ故、皇朝ノ古書多ク吳音ヲ用フ。其初テ傳ハリシ時代ヲ考レバ、彼國ニテハ唐ヨリ以前ニ當レバ、字音モ唐朝以前ノ者ナルヲ以テ、自ラ後世ノ音ニ異ナルモアルベシ。然ルニ、今時世ニ布ク韻書ハ、多ク其後ニ作レルモノナレバ、ソレニ合ハザルヲ以テ、妄ニ皇朝ノ古音ヲ改ムベカラズト。此說道理アリ故ニ今時讀ム所ノ三經ノ音ノ中、後世韻學者ノ讀ム吳音ニ合ハザルモノアレドモ、皇朝傳來ノ古音ニ合スルモノハ、必シモコレヲ改メズ。然レドモ多クノ文字ノ中、後世ニ至テ其音訛轉スルモノ無コト能ハズ、今コレヲ韻書并ニ皇朝ノ古書ニ考ヘテ、其訛讀字ハ皆改テ正音ヲ附ス。又其訛讀ザル字モ、初學ノ讀ミ難キ字ニハ多ク假字ヲ附ス。

一、皇朝ニ古ク傳ハル字音、大抵古事記、日本紀、萬葉集、ナドノ假字ニ用タル音ヲ以テ知ベシ。假字トハ、漢字ノ音ヲ藉テ、此方ノ言語ヲ記スヲ云。凡テ皇朝ノ人ノ言語ハ、皆單音ニシテ、五十字音ヲ出デズ。此五十字音ニ、一切ノ語

音ヲ攝ス。然ルニ漢字ノ中、漢音ハ單音甚少シ五十音中、ナニヌネノマミムモエケセテヘレエノ十七音ヲ闕ク。吳

音ハ、往古ハセテレノヘスネノ七音ヲ闕ク。今時ノ吳音ハ、唯ノ一音ノミ無シ。其餘ハ皆アリ。其中漢音ハ、今ノ

所用ニ非ザレバコレヲ論ゼズ。且吳音ノ古今ノ差別ヲ辯ズベシ。按ズルニ、往古此方ニテ初テ漢字ノ吳音ヲ定メタル

時、單音ノセテレノヘスネノ七音ヲ闕ク。故ニ其單音ニ當ル字無レバ、勢帝禮乃弊須禰等ノ重音ノ字ヲ、單音トナシ

テ用タリ。其餘ノ音ニハ、皆某某ニ當ル單音ノ字アレバ、其音ノマ、ニ用タリ。其中ニモ、問重音ノ字ヲ雜ヘタルモ

アレドモ、上ノ七音ノ皆重音ノ字ノミ用タルニハ同ジカラズ。但シ萬葉集ニセノ假字ニ世勢等ノ重音ヲ用ヒタル中ニ、單音

用ヒタリ、萬葉ハセニ單音ノ字無キ故ニ、通音ニ轉ジテセノ音トナシテ用フ、又古事記ニセノ假字ニ是ヲ用ヒ、日本紀ニハシノ音ニ

タルモ、是ハモトジノ音ナルヲ、通音ニ轉ジテセノ音トナシタルニテ、モトヨリセノ單音ノ字ニハアラズ。其外ニモ、米買等ノ

重音ヲメノ單音ニ用タレドモ、中ニ馬咩等ハ其音ノマ、ナレバ、上ノ七音ノ其音全ク闕テ、單音ニ當ル字ナケレバ、

重音ノ字ノミヲ用タルニハ同ジカラズ。然ルニ今時韻學者ノ用フル吳音ニハ、上ノ七音ノ中、唯ノ一音ノミ有コト

ナシ。其餘ノセテレヘスネノ音ハ、皆某某ニ當ル字アリ。然レドモ今猶一字モ其音ヲ讀コトナシ。コレ後世ノ訛轉

ニ非ズシテ、往古ヨリシテ爾バナリ。今且三經ノ中ニ出タル字ニ於テ、其六音ニ當ル字ヲ舉ベ最碎債罪摧吳音ハ皆セ

ゼナレドモ、常ニ漢吳トモニサイザイ呼退對吳音テナンドモ、常ニ漢吳トモニタイト呼雷ノ吳音レナレドモ常ニ漢吳

トモニライト呼拜敗重輩吳音皆ヘナレドモ、常ニハ漢吳トモニハイト呼總忠聰綜ノ吳音ミナスナレドモ、常ニ漢吳ト

モンウト呼内ノ吳音、ネナレドモ反切ヲモ奴對反トヨメバナイト呼。以上ノ最退雷總拜内ノ吳音、往古モセテレスヘ

ネット呼タラバ、何ソ最退雷總拜内ノ單音ノ字數多アルヲバ、一字モ古書ニ其音ノ假字ニ用スシテ、勢西齊劑栖世豆提

涅諦泥涅禮例黎奚殊菊輸酒秀陸沛瓊杯閑禰泥倭涅禰年等ノ重音ノ字ノミヲ用ンヤ。故ニ往古ヨリ其音ヲ呼ザルコト明ケシ。

弟耐等禮連憐等須周主受儒等倍幣併等禰年等ノ重音ノ字ノミヲ用ンヤ。故ニ往古ヨリ其音ヲ呼ザルコト明ケシ。又上ノ最退雷總拜内ノ字、吳音ノマ、ニ最勝ヲセシヤウ、不退ヲフテ、雷音ヲレラン、總持ヲスジ、禮拜ヲライヘ、

華内ヲケネナド連ネ讀ムトキハ、何レモ鄙俚ニ聞コフレバ、其音ヲ呼ザルモ宜ナリ。

一、上ノ六音ニ當ル字ノ外ニモ、常ニ唯漢音ヲ呼デ、吳音ヲ呼ザル字アリ。又二音ヲ別ニ呼アリ。東冬兜投鬪動童同洞吳音ハツ・ヅナレドモ、常ニハ漢吳トモニトウ・ドウト呼。又同シ音ナレドモ通痛頭ハ常ニモ、漢音ハトウ、吳音ハツ・ヅト呼。萬葉ニモ通頭ヲツ・ヅノ音ニ用ユ親杜徒土度ノ吳音ツ・ヅナレドモ、常ニ漢吳トモニト・ドト呼。古事記、日本紀、萬葉集ニモ、五字皆トノ音ニ用フ、又同ジ音ナレドモ途ハ常ニモ漢音ハト吳音ハツト呼。日本紀ニモ途ヲヅノ音ニ用ユ、又孤古故固願辜吳音ハ皆クナレドモ常ニ漢吳トモニトコト呼。古事記、日本紀、並ニ孤古故固願ヲミナコノ音ニ用タレバ、辜モクト呼ザルコト准シテ知ベシ。嘉伽迦跏吳音皆ケナレドモ、喜樂、伽耶、釋迦、迦葉、結跏ナド昔ヨリ皆カト呼。古事記、日本紀、並ニ伽迦ヲミナカノ音ニ用ヒテ、ケト讀タル處ナシ善ノ吳音ブナレドモ、菩薩菩提ナド漢音ニ同ジクボト呼。古事記ニモボノ音ニ用ユ漏ノ吳音ルナレドモ、常ニ漢吳トモニロト呼。萬葉ニモ口ノ音ニ用フ既幾吳音ケナレドモ、常ニ漢吳トモニキト呼。日本紀ニモキノ音ニ用フ、其外ニモ往古ヨリ吳音ヲ呼バズ、漢吳同音ニ讀字アレドモ、今ハ三經ニ出タル字ノミヲ舉グ、此下皆爾リ以上ノ字、常ニ讀トコロ、皆皇朝ノ古音ト合スレバトヒ上代ハ今時ホドニ、漢吳ノ呼法委シカラザルニモアレ、久シク讀來テ、世學テ常ニ呼ブ音ナレバ、コレヲ改メズ。

一、佛書ニテモ、常ニ漢音讀、ミ來ル字宅吳音チヤクナレドモ、火宅ナド常ニ漢音ニタクト呼輒吳音ネン感ノ吳音コンナレドモ、柔軟感應ナド常ニ漢音ニナン・カント呼染ノ吳音ネンナレドモ、常ニゼント呼飽ノ吳音モヒヤウナレドモ、常ニバウト呼急給泣及ノ吳音コウゴウナレドモ、常ニ漢音ニキウギウト呼脇狂況ノ吳音モコウナレドモ、常ニ漢音ニキヤウト呼漿將ノ吳音ソウナレドモ、常ニ漢音ニシヤウト呼諫ノ吳音ケンナレドモ、常ニ漢音カント呼鷹ノ吳音モゲンナレドモ、常ニ漢音ニガント呼走奏嗽ノ吳音モシユナレドモ、常ニハソウト呼琥珀ノ吳音クビヤクナレドモ、常ニ漢音ニ讀ム閻ノ吳音モランナレドモ、常ニ漢音ニアント呼赫ノ吳音モキヤクナレドモ、常ニ漢音ニカクト呼罰伐ノ吳

音モボツナレドモ、常ニバチ又ハバツト呼凡テ入聲ツノヒビキアルハ吳音ハ皆チナレドモ一七八イナシテ、目捷連ナド常ニ漢音ニケント讀ム。近ゴロ改テモクコンレント讀ム人モアレドモ、上ノ釋迦迦葉ノ例ノ如ク、久シク讀來レルハ改メズシテ可ナリ。

一、吳音ニ讀ベキヲ、人多ク辨ワキマヘズシテ漢音ニ讀字濯濁同ジク直角反ニテ吳音ハ共ニテヨクナルヲ、人多ク濁ダマシハ吳音ニ讀メドモ、濯ソダシハ漢音ニタクト讀ム。玉獄同ジク魚欲反ニテ、共ニ吳音ハゴクナルヲ、人多ク獄ダマシ、吳音ニ讀メドモ、玉ハ漢音ニギヨクト讀ム。昔ハ玉篇モ吳音ニゴクヘント讀メリ。反翻旛同ジク孚袁反ニテ、共ニ吳音ハホンナルヲ、人多ク反翻ハシクハ吳音ニ讀メドモ、旛ハシクハ漢音ニバントヨム怪快乖悞憤吳音ハ皆ケナルヲ、人多ク怪快乖ケケケ悞憤ケケケハ漢音ニクワイト讀ム猥穢同ジク吳音ハエナルヲ、人多ク穢チハ吳音ニ讀メドモ、猥チハ漢音ニワイト讀ム種松同ジク吳音ハシユナルヲ、種シユハ吳音ニ讀メドモ、松シユハ漢音ニシヨウト讀ム。今松シユ松シユヲソウソウト讀ムハ、漢音ニモ吳音ニモアラズ、以上ノ類ハ、人多ク漢音ニ讀メドモ、皆改テ吳音ヲ附ス。

一、人多ク吳音ヲ誤リ讀ム字咸胡讒反ニテ、漢音カン吳音ガンナルヲ、誤テ吳音ヲゲント讀ム側莊色反ニテ、漢音シヨク吳音シキナルヲ、誤テ吳音ヲソクト讀ム錯倉各反ニテ、漢吳トモニサクナルヲ、誤テ吳音ヲシヤクト讀ム。

一、往古ヨリ通音ニ轉ジテ呼字其期欺漢吳共ニ皆キナレドモ、常ニハ通音ニ轉ジテ吳音ゴト呼。古事記、萬葉集ニ其期ヲゴノ音ニ用ヒタレバ、欺モ同ジク其チニ從フ字ナレバ、ゴト呼ベルナルベシ。己モ記紀起忌ナドト同ジク、漢吳トモニキナレドモ、吳音ハ通音ニ轉ジテコト呼。記紀起忌スデニ己チニ從フ字ニテ、漢吳皆キト呼ベバ、己ノ字ハ固ヨリキト呼ベケレドモ、萬葉集ニ、處處ニコノ音ニ用ヒタルヨリ、常ニコト呼。施是漢吳トモニシナレド、吳音昔ヨリ通音ニ轉ジテ、施シヲセシ是シヲゼト呼コト、上ニ己チニ辨ゼルガ如シ盧モ漢吳トモニロナレドモ、寘頭盧ナド通音ニ轉ジテルト呼萬葉集ニモルノ音ニ用ユ後モ漢音コウ、吳音クナレドモ、常ニ通音轉ジテゴト呼。萬葉集ニゴノ音ニ用ユタレバ、古

來ゴト呼タルコト知ベル。權モ漢音ケン吳音ゲンナレドモ、常ニ通音ニ轉ジテ吳音ヲゴント呼。盲萌モ同ジク莫耕反ナレバ、漢音バウ吳音ミヤウナレドモ、常ニ吳音ヲマウト呼。和名抄ニ盲ノ音亡トアレバ、昔ヨリマウト呼タルコト知ベシ。

一、昔ヨリ韻ヲ省テ單音ニ讀來類、弟子ヲズイシテシ南無ナムヲナム、世尊セインヲセソン、不可計フカザイヲフカゲト呼類ノ如シ。皆皇朝ノ讀法ナリ其中世ト計トハ常ニ單音ニ讀ム。コレハ萬葉ナドニ世計セイケイヲセケノ假字ニ用ヒタルヨリ、常ニ呼ナレタルニテ、セイケイハ漢音ノヤウニ思ヘルハ非ナリ。

一、佛書ニ昔ヨリ讀來ル音迎ハ平聲ト去聲トニ通ジテ、音義モ異ナレドモ、此方ニテハ音ヲ以テハ呼分セヘカガカタケレバ、平聲ニマレ去聲ニマレ共ニ漢音ゲイ吳音ギヤウナルヲ、來迎ナド常ニカウト呼。畜モ畜積ノ畜ハ勅六反ナレバ、チクト呼ベケレドモ、畜生ノ畜、六畜ノ畜ハ、許竹反ナレバキク、許久反ナレバ漢音ハキウ、吳音ハクナレドモ、佛書並ニ皆チクト呼。穉モ漢音ハドウ、吳音ハナウナレドモ、阿穉ハ古來梵音ニ依テ奴沃反ヌワクトナシテノクト呼。藐モ本音ハ、摸角反ナレバ漢音ハバク、吳音ハマクナリ、彌紹反ビセウナレバ漢音ハベウ、吳音ハメウナレドモ、三藐ノ藐ハ、古來梵音ニ依テ、彌略反ミリヤクトナシテミヤクト呼。又弘モ漢音ハカウ吳音ハワウナレドモ、佛書ニテハスベテグト讀ム。穉モ尋閱ト同字ニテ、五愛反ゴアイナレバ、漢吳トモニガイナレドモ、吳音ヲゲト呼。此方ノ古書ニ、愛ヲエノ音ニ用ヒタレバ、五愛反ナレバゲトナル故ニヤ。梵モ父云吳ナレバ漢音ハフン、吳音ハブンナレドモ、吳音ヲ常ニボント讀ム。竭モ巨列反ナレバ、漢吳トモニケツツナレドモ、吳音ヲ常ニカツツ讀。摩竭提國摩竭大魚ナレドモ常ニカツツ讀ム。縱モ子用反ナレバ、漢音シヤウ吳音シユナレドモ、縱横ナド常ニ濁音ニジウトヨム。以上ノ三音ハ、由來誤ユヤウヨムコトヲ知ト雖モ、久シク讀來レバ、ニハカニ改メガタシ。曰モ越ト同音ナレバ、漢音エツ、吳音ヲツナレドモ、玉篇ニ禹月反ウゲツトスレバ、常ニハウワツトヨム。誑モ漢音キヤウ、吳音カウナレドモ、常ニワウト呼。韻鏡三十二轉牙音ニ屬シテ狂ト同音ナリ、

合轉ノ字ハ拗音ニテ、カウヲモクアウト呼ブ故、遂ニ轉ジテワウトナレルニヤ。俱舍唯識ノ心所ノ名、並ニ誑惑ナドモ皆ワウト呼。

一、借字ノ音ハ、本音ニ依テ其音ヲ附ス。古文字少ケレバ、外典ノ古書ノ中ニハ、借字多シ、女ヲ汝ノ字トナシ。道ヲ導ノ字ト作シテ用フル等ノ如シ。然ルニ佛經ハ、東漢以後ニ譯セル故ニ、文字已ニ備ハレバ、借字甚少シ唯大經下卷ノ、輒内彼宮中ノ内ノミ、納ノ字ト作シテ讀ム。音モナフト讀ベシ、字ノ如クナイト讀ベカラズ。論語ニ出内ノ啓。孟子ニ若己推而内之溝中ノ内ノ如シ。因ニイフ日中禮讀ノ五道衆生内身中ノ内モナフトヨムベシ。

一、一字ニ多音アルハ、義ニ從テ其音ヲ附ス樂音樂ノ樂ハ音ガク喜樂ノ樂ハ音ラク樂欲ノ樂ハ音ゲウ、度法度ノ度ハ音ド計度ノ度ハ音タク、葉樹葉ノ葉ハ音エウ迦葉ノ葉ハ音セフ、著著明ノ著ハ音チヨ執著ノ著ハ音ヂヤク被著ノ著ハ音ヂヤク、易變易ノ易ハ音ヤク難易ノ易ハ音イ、識知識ノ識ハ音シキ記識ノ識ハ音シ、數算數ノ數ハ音シユ串數ノ數ハ音ソク、切迫切ノ切ハ音セツ一切ノ切ハ音サイ、出出入ノ出ハ音シユツ出納ノ出ハ音スイ、復還復ノ復ハ音フク亦復ハ音フ、塞邊塞ノ塞ハ音サイ悶塞ノ塞ハ音ソク、覆反覆ノ覆ハ音フク覆蓋ノ覆ハ音フ、惡善惡ノ惡ハ音アク厭惡ノ惡ハ音ヲ、行行歩ノ行聲平不ヤウヤウ行去聲ハ音ギヤウ行列ノ行ハ音ゴウ、索繩索ノ索ハ音サク求索ノ索ハ音シヤク等ノ如シ是等ハ其濫シキ方ニ假字ヲ附ス其外遠離ノ遠去聲遠近ノ遠上聲長短ノ長平聲長幼ノ長上聲等ノ如キ、音義異ナレドモ、此方ニテハ呼分ガタシ。遠離ノ遠、遠近ノ遠、トモニョント呼長短ノ長、長幼ノ長、同ジクヂヤウト呼ベバ、必シモ假字ヲ附セズ。因ニ論ズ。出三經ノ中處處ノ出ノ字、皆尺律反ニテシユツノ音ナリ。一處トシテスイト讀ベキ處ナシ。世多クイダスト訓ズル處ハ皆尺類反ニテ、スイノ音ト思ヘリ。是ハ字書ニ凡物自出則入聲、非ニ自出ニ而出レ之則去聲トアルヲ見テ、都テ和訓イダスト讀處ハスイノ音ト思ヘルナリ。是レ和訓ニ泥デ、委ク其義ヲ考ザレバナリ。出和雅音ノ出モ、諸鳥自ラ和雅ノ音ヲ出スニテ、コレヲ出スモノアルニ非ズ。出廣長舌相ノ出モ、諸佛自ラ舌相ヲ出スニテ、他人コレヲ引

出スニ非レバ、イダスト訓ジテモ皆シユツノ音ナリ。唯倉廩等ノ中ヨリ物ヲ出納スル時ノ出ノミ、スイノ音ナリ。又大經下卷ノ對曰不也ノ不、浦沒友トナシテ、ホツト讀モ非ナリ。寧樂彼處不ノ不ハ、可^カ否^カヲ問フ、イナヤト訓ズ。對曰不也ノ不ハ、否ト答フ、イナ、リト訓ズ。二ノ不字皆上聲、俯九反ニテ否ト同ジ、字書ニ否ハ不可ノ意言ニ見ルトモ又口許ザルナリトモ註ス。文義能ク通ズ。浦沒反トナシテホツト讀メバ、不然ナリト註シテ、シカラズト訓ズ。義ハ通ズト雖ドモ、文ニ於テ穩ナラズ。

一、連聲ノ時、下ノ字音便ニ轉ジテ讀モノハ、其音ヲ字ノ左ニ附シテ、正音ニ濫ゼザラシム。因縁ヲインネン、安養ヲアンニヤウト讀類ノ如シ。是皆自然ノ連聲ナリ。然ラザレバ聲ヲ犯ス。有家ニ聲聞縁覺ヲ、シヤウモンネンガクト讀シムルハ、連聲ノ法ニ非ズ。四字連讀スレドモ、聲聞ト縁覺ト別ナレバ、字ノ如ク讀デ、聲ヲ犯スコト無シ。

一、舊本文字ノ四隅ニ附スル所ノ四聲并ニ清濁ハ、此方ノ轉讀ノ音便ニ依ル。必シモ文字ノ當位ニ拘ズ、中ニ於テ入聲ノ文字ハタダ、優益羅華、益曇摩華ノ益ノミ、連聲ニ依テ上聲ニハト讀ム。餘ハ皆當位ノ如ク入聲ニ圈ス。間入聲ノ字ナレドモ、連聲ニテ引テ讀ム處ニハ、字ノ下ノ中ホドニ圈ス。法忍ノ法、淨業ノ業等ノ如シ。清濁モ本濁音ナルハ、横ニ二圈ヲ附ス。連聲ニ依テ濁ルハ、豎ニ二圈ヲ附ス。今ノ刻全ク舊本ニ依ル、而シテ一二ノ誤アルハコレヲ訂正スルノミ。

一、四聲ニ從テ、音義異ナル字ハ、今ノ刻發字ノ法ニ依テ、別ニ大圈ヲ加テ、讀ム者ヲシテ、其音義ヲ誤ラザラシム。樂ノ字、入聲ニ發スレバ、音ラク、タノシムト訓ジ。去聲ニ發スレバ、音ゲウ、ネガフト訓ズル類ノ如シ。此ニ委シクスベカラズ、音註ノ本ニ。粗コレヲ出ス。

文化癸酉之歲

華頂山監寺識

(二) 刻訓點清濁三部經凡例

(大雲)

一、三部妙典、文義深遠ニ諸師ノ疏釋廣博ニシテ、管見ノ及ブ所ニ非レバ、本經ニ訓點ヲ施スコト、實ニ容易ナラズ。依テ今、科圖本ノ指南ニ從ヒ。且合讀ノ解釋ニ參考シテ、訓點ヲ施シ文義ヲ通解シ易カラシメントス。合讀ノ解釋、古今ノ諸疏ヲ折中シテ、詳略宜ニ合ヒ、少モ間然スルコト無ケレドモ、猶訓點ノ間、一二ノ疑ハシキ事ナキニ非ズ。依テ今是ヲ諸書ニ質シテ、聊是ヲ改ム。固陋恐クハ訛謬アラン、タゞ識者ノ訂正ヲ乞フノミ。

一、凡ソ訓點ハ漢文ヲ回轉シテ國語ニナス事ナレバ章句ノ内虛字ニ活くわくヲキタル文字ハ皆和訓ヲ以テ讀マデハ叶ハヌ事ナルニ近世ノ人其ヲ煩ハシキ事ニ思ナシ虛字ヲ多ク音ニ讀下シテニヲハノ辭ヲモ省キテ簡略ナルヲ好ムハ大ナル誤ナリ是簡略ニハ非ズ不成語ト云フベシ今本細こニ訓點ヲ施テ繁ヲ厭ハズ國語ニ叶ハシメン事ヲ要トス。

一、今刻、音訓兩讀ノ用ニ備ヘントス、然ルニ本經ノ四聲ハ、連聲ニ依テ、轉呼スルニ從テ定メタルナレバ、訓讀スル時ニハ、本ノマ、清音ニテ、直讀ノ時ハ、連聲ニ依テ濁音トナルモノアリ。大經ノ請轉法輪、オヨビ所欲聞法ノ法ノ字、百千三昧ノ三ノ字等ナリ。是ノ如キハ、先直讀連聲ノ濁音ヲ付ケ、更ニ一圏ヲ添そテ、訓讀ノ時清音ニ讀ベキコトヲ知シム。又訓讀ノ時ト直讀ノ時ト、四聲ノ異ナルアリ。如純孝之子ノ純ノ字、如明淨鏡ノ明ノ字ノ如キ、直讀ニハ上聲ニシテ、訓讀ニハ去聲ナリ。此ノ如キモ、一々是ヲ誌スベケレドモ、本ヨリ連聲ニ依テ、自然ニ呼出サル、四聲ナレバ、煩ハシク是ヲ誌サズ、若悉ク知ラント欲セバ、科圖本ニト映シテ是ヲ見ルベシ。

一、汝等ハ、ナンヂラ、又ナンヂラト呼ベシ。タチハ我ヨリ上サマヘモ向テ云ヒ、ラハ下サマヘ向ヒテ云フ言ナリ、サルヲ、ナンヂラト云人アリ甚誤レリ、タチトラトハ、並べ唱フベキ言ニ非ズ。凡ソ三經ノ中ニ汝等トアルハ、如來ヨリ、菩薩聲聞ノ弟子等ニ向ヒテ、示玉フ言ナレバ、皆ナンヂラト云ベシ。或ハ補處ノ菩薩等ヲ指シ玉フ處ニテハ、

ナンダチト呼ビ、羅漢及ビ衆生等ヲ指シ玉フ處ニテハ、ナンヂラト分チ喚ンゾ可カルベキ。

一、何況ノ何ハ、イカニトヨムベシ。近ゴロ此何ヲナニトヨム人アリ、誤ナリ。詰詞ナレバ、必イカニトヨマデハ叶ハヌナリ。但ナニゾト呼ベバ通ズルナリ。

一、爲所ノ字ヲ用タル處、大經ノ爲諸菩薩聲聞大衆所共歎譽、又常爲諸佛所共稱歎ノ如キハ、ミナ爲_二諸菩薩聲聞大衆、所_三共歎譽_セ等トヨムベシ。又爲ノ字アリテ所ノ字ナキ、横爲非常水火爲心走使ノ如キモ、前ト同ジク、爲_レ心走使_セ等トヨムベシ。此爲_レヲタメトヨムハ誤ナリ。二ノ辭ヲアテ、可ナリ。

一、見如此事如是事等ノ事ヲ、皆音ニテ讀ムガ、內典ヲ讀ム習ハセノヤウニ思ヘル人多シ。是ハ經論ノ中ニ、理事相對シタル處ニテ、此理_レ此事ト音ニテ並ベ呼ブコトアルヲ、何處モ皆カクヨムベキコト、誤リ來レルナリ。タ_レシ理事相對ノ時モ、此理_レ此事ト訓讀スベキヲ、中古以來多ク音ニテ讀下スコトノナラハシトナリタルナリ。況ヤ理事相對ナラヌ處ニテハ、必コト或ハワザト訓スベキナリ。

一、今刻、字音ノ正訛ハ、スベテ華頂新刻ノ本ニ從フ、吳漢二音ノ差異等、委クハ彼正訛考ヲ閱シテ知ベシ。

一、惡露不淨ノ惡ヲ、合讚ニ去聲ト定メラレタリ是ハ慧琳音義五十四_{經ノ處}七十五_{ノ處}摩鄒女_{道地經}ニ、惡露ノ惡ヲ烏固切憎惡義ト云ニ依レルニテ、乘恩ノ大經音義モ亦然リ乘恩、玄應音義七ニ、於露切ト云ヘルヲモ引合セタレドモ、彼ハ法華譬喻品ノ、又復爲人、之所惡賤ノ惡ヲ釋シタルニテ、惡露ノ音釋ニアラズ。サレバ應師云何釋セラレタルン知リ叵シ。而ルニ華頂新本ニ、阿克・ヲ、二音共ニ付テ、而モアクヲ正トシ、ヲヲ傍トセリ。字書ヲ閱スルニ、此字不善、醜陋糞穢等ノ時ハ、入聲烏各切、憎疾、忌耻、等ノ時ハ、去聲烏故切トアリ。今經ハ老病者ノ身ヨリ穢物ノ流出テ、厭ハシキヲ指テ、惡露不淨無可樂者ト說玉ヘルニテ、其穢物ヲ指ナレバ、是入聲ナルベシ。心所法ノ惡作ヲ、俱舍論ニハ、緣_レ惡所作_ト、心追悔_ト說テ、惡作ヲ所緣ノ境トスルガ故ニ、惡ヲ入聲ニ呼ビ、唯識論ニハ、惡_ト所作_業、追悔_爲性_トアルニ依テ、去聲ニ呼等ノ如キハ、常ノコトニテ、字書ノ定モ、前ノ如クナレバ、入聲ヲ正トスレドモ、

慧琳ノミナラズ。放光般若經ノ音義ニモ去聲トシ、古師多ク此ニ依ラレタレバ、強テ非トセシコトヲ憚テ、傍ニ去聲ヲモ付ラレタルナラン。見者怪コトナカレ。

一、都漢音ハト、吳音ハツナリ。國語ノ假字ニモ、ツ清音ニ用ヒタリ。此字音華頂本ニ漏タレバコ、ニ載ス。但シ都無慙愧等ノ都、古來多クトノ音ニ呼ブ習ナレバ、今經モ之ニ從フベキカ。

一、古ヨリ字音ノ訛呼シ來レルモノ多シ、是ヲ以テ近世、華頂山ニ正訛ノ善本鐫刻アリテ、海内ニ流布ストイヘドモ、猶舊習ヲ改メズ、出ノシユツト呼ベキヲ、スエト呼ビ、行樹ノ行ヲギヤウト呼ビ、又長聲短聲ヲ錯呼スル類少カラズ。彼本ニハ、初心ノタメニ讀ガタク訛易キ字ニハ、假字ヲ付オカレタルヲ見ナガラ、尙訛ヲ傳フルハ心ナキ事ナリ。又近世大經下卷ノ、今世恨意ノ恨ヲ、ゲント訛呼スルモノ多シ。此等ハ云マデモナキ事ナレドモ、初心ノタメニ揭示ス。此等忽緒ニスマジキヲ庶幾フニナン。

嘉永五年歲在壬子仲秋

緣山沙門大雲識

正依三經字音清濁ノ呼法ハ義山上人ノ指南ヲ本トス然レト世人訓話ヲ誤リ吳漢二音ヲ訛呼スル者多シ西京淨福音激上人ノ憂ヒ文化年中字音正訛考ヲ著シ新刻三經ノ後ニ附テ流布ス爾後年月ヲ歷ル事久シク其版漫滅シテ亦用フベカラズ印本世ニ在者甚少シ因テ不肖微志ヲ企テ衣資ヲ儉シ再ビ版ニ彫リコレヲ本寺ノ寶庫ニ藏メ印版三經ト共ニ廣布セン事ヲ冀フニナム。

仰願觀蓮社妙譽大僧正深蓮社海譽大僧正眼譽貞海大和尚願譽貞典大和尚立譽大休大和尚空譽義柳上人十阿義聞和上莊嚴報地又願四恩三有法界含識同會寶刹

明治四年仲夏

沙門大雲欽白

浄土宗聖典 第1巻

平成6年1月25日発行

編集 浄土宗聖典刊行委員会

編集協力 浄土宗出版室

印刷 株式会社 図書印刷 同朋舎

発行 浄土宗

浄土宗宗務庁

〒605 京都市東山区林下町400-8
☎(075)525-2200(代)

浄土宗東京事務所

〒105 東京都港区芝公園4-7-4
☎(03)3436-3351(代)

